

もに遜る存在としての人間の平等を考えていた。キルケゴールは、神の仲立ちなしに単に一人の人間と他の人間を同列に並べる「大衆の平等」を語らない。こうした「この世的な平等」は、「単独者」たちの平等、すなわちキリスト教的な「神の前の平等」とは異質なものである。

しかし、右に述べたように、正義と愛という二つの基準は同時に存在し、弁証法的に関係し合うのであるから、両者は決して無関係のままではない。C・S・エヴァンスも指摘するように、いわば水が低きに流れるように、神の前の平等は、政治的な平等へと波及的な効果を及ぼすものとして考えられている。キルケゴールは、新約聖書に愛の実践の命令を読みとったがゆえに、政治的状况を改善しようとしないう信仰の在り方を厳しく批判した。すでに述べたように、「真理の証人」を目印にしてキリストを倣う者は、卑賤へと落ち込むことを覚悟して自らを与える者として考えられていた。もし我々がキルケゴール以上のような迂回路をとることを許すならば、そこにある種の正義論を見出すことは十分可能であると言えよう。

ニーチェ後期思想における

宗教と「教育」という問題

松田 愛

ニーチェが宗教、とりわけキリスト教に対して批判的であったことはよく知られている。ニーチェによれば、宗教は生の

「苦悩」との戦いであり（『道徳の系譜学』第三論文十七節）、価値を「逆立ち」させることによって「弱者」の生存を維持する（『善悪の彼岸』六十二節）。近代ヨーロッパではキリスト教によって人間が「弱体化」している、とニーチェは批判する。

ニーチェは、宗教的人間の「弱さ」から生じる「ルサンチマン」のうちに、「善」「悪」という価値判断の「起源」を求め、本発表は、まず、「起源」という言葉によってニーチェが何を意味していたのかを考えてみたい。ニーチェ自身、道徳的感情や評価の発生史とその批判とは区別されるべきものである、と明言している（『悦ばしき知識』三百四十五節）。『道徳の系譜学』では、ニーチェの言い方を吟味すれば、現在の道徳の「価値」についての否定的見通しの下で、「起源」が追求されていることがわかる（『道徳の系譜学』序言五、六節）。ということは、「起源」は、歴史的過去における一回限りの問題ではなく、「善」「悪」という価値判断を行う人間を現在においても規定している根源的な生存のことである。

ニーチェによれば、自己の「悪しき」欲求に打ち克とうとする禁欲によって「ルサンチマン」は方向転換する。「疾しい良心」が自己の「悪」を意識し、「負い目」を強く感じることによって、「弱者」は苦悩を感じなくなる。ただし、それは苦悩の倍加であり、「弱者」のさらなる「弱体化」でもある（『道徳の系譜学』第三論文二十、二十一節）。このように、一方で、ニーチェは、宗教が「強者」を否定し「弱者」を維持する点を批判するが、他方で、宗教的禁欲・「克己」を哲学者の「教育」の手段である、とも言う（『善悪の彼岸』六十一、六十二節）。

つまり、宗教は人間を高め、強くするものでもある、とニーチェは考えている。ニーチェにおいては、人間の類型を高めるために、換言すれば「人間の自己超克」のために、哲学者が新たな価値の創造・あらゆる価値の再「価値転換」という課題を担う。このような哲学者は未だ不可能であり、「未来の哲学者」である。「未来の哲学者」が生まれるために、禁欲的「克己」による「人間の自己超克」が行われなければならない。では「人間の自己超克」のために宗教的禁欲・「克己」が役立つとはどういうことだろうか。

ニーチェは宗教的禁欲・「克己」における「疾しい良心」の否定的働きに、「自己超克」という運動の原理を見出している。「自己超克」という運動は、まず、科学による宗教の反駁において見出される。疑わしいものによって「真理」への欲求を満たすことを科学に厳しく禁ずる「誠実さ」は、キリスト教道徳の「誠実さ」に由来する、とニーチェは考える(『道徳の系譜学』第三論文二十七節)。ただし、科学的「誠実さ」は宗教に由来しつつも、それを否定し超え出ている。なぜならば、自己に対する否定がメタ化されているからである。このメタ化の働きは「誠実さ」のうちに含まれている。「誠実」であろうとすれば、「自己自身が本当に「誠実」であるのか否かが良心に厳しく問われる。この自己言及作用に基づくならば、科学の「誠実さ」もまた否定され「自己超克」が起こらねばならない。そして、「疾しい良心」の自己言及的な否定性による科学の「自己超克」のプロセスこそが、哲学者の「教育」である。

本発表は、哲学者の「教育」の手段としての宗教という議論

に注目し、ニーチェの宗教に対する肯定的側面を明らかにすることを試みた。ニーチェ哲学の宗教に対する肯定と否定という両義性は、自己否定の持つ両義性である。宗教は否定の形式を提供するという形で「人間の自己超克」に寄与し得るのである。ニーチェによれば、生否定を強化するべきではなく、生を否定する自己を否定し、自己否定を強化しメタ化しなければならぬ。

前期ヤスパースにおける

信仰と信仰の交わりの問題

藤田 俊輔

ヤスパースは、宗教だけでなく哲学の立場をも信仰であるとする独特の立場を打ち出した思想家であった。こうした彼の立場を最も明確に表しているのが、「哲学的信仰」という術語である。哲学的信仰は『理性と実存』(一九三五年)以降の後期ヤスパース哲学を特徴づける重要な概念であり、またこうした哲学的信仰の立場から、宗教的信仰との交わりも積極的に試みられるようになる。しかし、こうした哲学的信仰の萌芽はすでに前期の名著『哲学』(一九三二年)において認められるものであり、そこでは信仰は実存に固有の「絶対意識(Absolutes Bewußtsein)」の充実態として、愛や想像力と並んで取り扱われている。絶対意識とは、ヤスパースによれば「実存の存在確信」に他ならず、体験としての意識ならびに意識一般といっ